

敬意と感謝とを



東日本大震災津波の発生から2年半余りが経過し、3度目のお盆を迎えました。

多くの尊い県民の命と、営々として築きあげてきた財産等が一瞬で失われたあの日から、被災地では、復旧・復興に向けて、全国からの言葉に尽くせぬご支援と励ましをいただき、それを心の支えとして、ここまで懸命に歩みを進めることができました。

また、3.11の発災直後から今に至るまで、被災地の力になりたいとする、純粋な思いをもって全国各地から駆けつけて下さった、40万人を超えるボランティアの皆様のひたむきな姿が、絶望、悲嘆に陥りがちな被災者の気持ちを奮い立たせ、明日に立ち向って進む「勇気と希望」を与えて下さいました。

ここに、これまでご支援いただきました皆様に対し、心からの御礼と感謝を申し上げます。

さて、北上高地で隔てられ、被災地から遠くに位置する岩手県社会福祉協議会は、当時、確かな情報もないままに、いち早く災害ボランティアセンターを立上げ、沿岸市町村社会福祉協議会を支援するための体制を整えるとともに、全国社会福祉協議会をはじめ、都道府県社会福祉協議会、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議、そして民間支援団体等からの応援を頂きながら、以来これまで各種の支援活動に取り組んできました。

一方、被災地に位置する沿岸市町村社会福祉協議会においては、自ら被災している職員を抱えながらも、それまで経験したこともない数多くのボランティアの受入れや、ニーズ調査から派遣までの一連のコーディネート等に取り組みました。これまでの間、全国から馳せ参じてくれた社協仲間などの、真摯・誠実な姿勢に学びながら、そして思いを一つにする多くの支援者とともに、一つひとつ課題を克服しながら、災害ボランティアセンターとして、また地域福祉を推進する役割を担う社協として、地道な運営が続けられて参りました。

避難所生活が終息した平成23年8月以降は、応急仮設住宅や、いわゆるみなし仮設住宅などで暮らし始めた被災者の孤立防止など、被災者一人ひとりに寄り添い、生活を支える訪問型支援を行う生活支援相談員を、県社協及び県内各市町村社協に200名を超えて配置するなど、市町村社会福祉協議会の後ろ盾となれるよう、県社協としての役割を果たすべく努めて参りました。

生活支援相談員の採用は急を要することもあり、資格、経験には拘らずに募集したことから、被災者との面接スキルや思いを受け止める上での注意点などを身につけてもらうため、著名な先生方や過去の災害で復興支援に携わった多くの方々に助言・指導を頂き、研修を積ませて頂いたことは大きな支えとなっています。

この度の大災害への対応は、数えきれないほどたくさんの方々からのご支援があったからこそ、県社協、そして市町村社協としての果たすべき役割を、十分ではないながらも担うことができたものと考えています。

また、この大災害によって、改めて人と人の結びつきの大切さを痛感させられ、支えられていることへの感謝の思いを強くしたところであります。

今、当県では、特に被災地を中心として、地域住民同士の支え合いを絶やすことのないように、地域コミュニティの再生、構築の必要性が認識され、住民相互の助け合いを軸とした、共助のまちづくりに向けた取組みが始められつつあります。

その動きは、復興への長い道のりを照らす希望の光として、まだささやかな光ではありますが、少しずつその数を増やしていっているように感じています。

発災後2年半を経過し、ようやく復興公営住宅などの建設も本格化してきていますが、今後、新たにつくられる生活の場・地域環境の中において、災害前にも増して人と人との強い絆をつくっていくために、社協人としてどう取組んでいくかが大きな課題と考えております。

このような中、これまでご支援下さった数多くの方々に対して、改めて感謝の気持ちをお伝えするとともに、大災害を経験して得た教訓、そして学び等を後世に残したいという思いから、この度、つたなき報告書ではありますが刊行する運びとなりました。

私ども岩手県社会福祉協議会は、これからも、市町村社会福祉協議会や社会福祉施設など、同じ福祉に携わる機関・団体等と一層連携協働を深めながら、被災地の復興はもとより、県内各地域において、住民とともに進める福祉のまちづくりに努力していくことを肝に命じ、併せてこれまでのご協力、ご支援に、深甚の敬意と感謝を申し上げ、報告書発刊のご挨拶といたします。

平成25年9月

岩手県社会福祉協議会

桑島 博

